

# 異聞風聞

編集委員  
大西 隆雄

各党党首の参院選遊説で印象に残ったのは、安倍晋三首相の次の一言である。

「私たちが進めている道は間違っていないんです。この道しかないんです、皆さん」

「この道」が指すのは、無論、経済成長にひた走る道だ。金融緩和、財政出動、成長戦略の「3本の矢」。今後10年間の平均で、国内総生産(GDP)の名目3%程度の成長を目指すのだと自民党の公約にある。

果たしてそれが唯一無二か。「別の道」があるではないかと、成長路線からの決別を主張する人々もいる。転換のキーワードは「縮小」だ。物質的豊かさを

追い続ける成長の限界を自覚し、「GDPが低くても幸福に暮らせる」道を探ろうと――。

◆ ◆ 「縮小社会研究会」という集まりがある。2008年に京都を拠点に工学、経済学、農学などの専門家約30人で発足。会を重ねることに「面白い議論をやっている」と評判になり、今や会報メールの宛先は約300人

に増えた。今年1月、一般社団法人として再出発した。代表理事の松久寛(65)さん(65) 京大名誉教授(振動工学) 同書の第1章は「脱原発は縮小社会への入り口」。以下「成長の限界点」「再生可能エネルギーの可能性」「日本経済の縮小」と続き、脱原発と経済規模縮小による転換を提唱する。 京都以外での開催は初という

## 「縮小社会」という別の道

研究成果の中間報告を兼ね、昨年4月、「縮小社会への道」(日刊工業新聞社)を出した。副題が意図を言い当てている。「原発も経済成長もいらぬ不幸福な社会を目指して」

京大教授ら会員5人の共著。松久さんはこう書いた。「何となく不安を持ちながらも、何とかなるであろうと、誰もが将来の議論を避けてきた」。エネルギー

ギョー消費の拡大と歯止めなき成長――。福島原発事故はそうした根拠なき楽観と経済の量的拡大主義の帰結である、と。

凝り固まっていた。でも成長のデメリットを感じる。生産性アップや大量生産、利益至上主義の社会は行き詰まると思う

「縮小社会」は絵空事だろうか。研究会の面々は技術にも経済にも精通している。学者だけでなく、現役・OBの企業経営者・幹部もいる。彼らを異端視し、毎度の成長路線を唱える政

治で問題は片付くのか。答えは否だと私は思う。加速度的に進む人口減少(約百年後に日本の総人口は約3分の1に縮小)前掲書)があるから。たとえ原発を再稼働しても核のごみは解決できず破綻は明白だから。何よりも、「経済の拡大がすべてを解決する」という成長信仰からの転換が3・11後の日本の命題だと思っからである。 今度の選挙には既視感が漂っている。昨年暮れの衆院選で自民党が圧勝して政権復帰し、今回どの世論調査もその流れの継続を予測している。衆院選で不発に終わった原発論戦は今度も拡散し、焦点が絞りきれない。 結果は見えている――と言っなら、恐らくその通りだろう。 しかし、結果にかかわらず、日本社会の課題は厳然としてそこに残る。日本国民の生き方を問う選挙だと思っゆえんである。

2013・7・14  
(次回は28日に掲載します)